童話

何故さう物語(二)

——ラットヤッド・キプリング——

中野好夫譯

二、何故駱駝の背中にたん瘤が出來たかといふお話

サア、皆さん、今度はあの駱駝——皆さん、駱駝は知つてゐますネ、さうです、無論、知つてゐますこも。——あの駱駝のお背中に何故タン瘤が出來たか、こいふお話です。

まだこの世界が出來たてのそれはそれはホヤホヤの時分、そしていろんな獸達がやつこ私達人間の御用をして、役に立ちはじめた頃のお話です。一匹の駱駝が住んで居りました。駱駝は淋しい淋しい沙漠の眞中に住んで居りました。木の根つこや草の葉つぱや、茨の刺なこを食べてゐて、それはそれはこても怠け者でありました。若し誰れかが話しかけても、たゞ鼻の先で『フン！』こ一言答へるばかりでありました。『フフン！』こ一言、ほんこにたゞそれだけなのです。

月曜日の朝でした。一匹の馬がヒョックリ駱駝のこころへやつて參りました。馬は背中に鞍を背負ひ、口には轡をはめて居りました。馬が申しました。『モシ、モシ、駱駝さん、サア、私達のやうに驅けまはらうぢやありませんか』。

『フン！』駱駝は答へました。で仕方なしに馬は歸つて來て、このここを人間に申しました。

まもなく一本の木片れを口に銜へた犬がやつて參りました。犬は申しました。『モシモシ、駱駝さん、サアサア、私達のやうに荷物運びでもしようぢやありませんか』。

『フン！』駱駝は申しました。そこで犬は仕方なく歸つ

て、このことを人間に申しました。

間もなく今度は、首に大きな軛をつけた牛がやつて參りました。牛は申しました。『モシ、モシ、駱駝さん。サアサア、私達のやうに畑でも耕しては如何ですか』。

『フン！』駱駝は申しました。そこで牛は仕方なく歸つて、このことを人間に申しました。

ある日の夕方、人間は馬と犬と牛とを呼び集めました。そして申しました。『あゝ、皆の者、ほんとに御苦勞ぢやつた。何しろ世界中がこの通り出來たてのホヤホヤぢやからな。ところが、あの沙漠にゐるフン先生ぢやよ。奴めは全く仕事をしない、でなければや、もうとつくに此處へやつて來てゐる筈ぢや。で俺は、あんな奴はうつちやつて置かうと思ふのぢやが、その代りに、お氣の毒ぢやが、お前達は二倍方働いてくれんといけんぞ』。

サア、三匹の者はカンカンになつて腹を立てました。そこでいよ〳〵荒野で會議を開くことになりました。丁度折よくその評定がはじまつた時刻に、例の駱駝のフン先生もいつものやうに草の葉つぱをムシャムシャやりながら通りかゝつたのでありますが、三匹の姿を見ると、又しても『フン!!』と一言言つたまゝゲラゲラ笑ひながら行つてしまひました。

それからまもなく、沙漠の遙か向ふに高い高い土煙りが上つたと思ふと、この沙漠を支配してゐる魔法使ひが土煙りの雲に乘つてまつしぐらに飛んで參りました。(魔法使ひはいつもこうして旅をするのです、無論そこが魔法なのです)。魔法使ひは雲から降りると三匹の者と一緒になつて、いよいよ評定がはじまりました。

『沙漠の王樣に申上げます』。と馬が申しました。『世界はまだこんな出來立てのホヤホヤでありますのに、誰れにもせよ、一體怠けて居てもよろしいので御座いますか』。

『無論、よろしくない』。魔法使ひは申しました。

『ところが王樣』馬は申しました、『この沙漠の眞中に不屆な奴が一匹居るので御座います。(無論奴めもやつぱりこの沙漠生え抜きの者なので御座いますが)。長い首をして、長い足を持つてゐるくせに、月曜の朝つぱらから何一つ働かうともしないので御座います。なにしろ、驅けつこ一つし

ないんで御座います』。

『なるほど』。魔法使ひは吐息をついて申しました。『彼奴はたしかに俺の駱駝ぢやよ。ところで、彼奴は何と申して居るのぢや』。

『フン！と吐すんで御座います』。と犬が申しました。『それでゐて、物一つ持ち運ばうともしないので御座いますよ』。

駱駝の背の瘤のサシ畫

『で何か外には申して居らぬかな』。

『それが、王樣、たゞ一言、フン！それだけなんで御座いますよ、それで畑一つ耕すことさへしないで……』。

『よろしい』。魔法使ひは申しました。『まあ暫らく待つて居てもらひたい。彼奴め、俺が一つうんとひどい目にあはせてやるからな』。

そこで魔法使ひはまたしても土煙りの雲を捲き起して、眞一文字に沙漠を横切つて參りました。すると果してフン先生が沙漠の水たまりに映る自分の姿にニヤニヤ見惚れながら、ノラクラしてゐるではありませんか。

『コラコラ、このブッブッ屋』。魔法使ひは申しました。『貴樣は一向仕事をしないといふ噂を耳にするが、これや一體どうしたといふのぢや。世界はこの通りまだ出來立てのホヤホヤぢやといふことが貴樣の目には見えぬのか』。

『フン!!』駱駝は申しました。

『コリヤ、やい。俺が貴樣ぢやつたら、二度とそ

んな返答はせんぞ』。魔法使ひは申しました。『いゝか、今一度言つてみろ。俺は貴樣に仕事をしろといふのぢや』。

それでも駱駝はまたしても、『フン!!』と申しました。が今度はその『フン』が口から出るが早いか、あの駱駝が常々自慢にしてゐた大事の背中が、だん〳〵とふくらんで來て、見るみるうちに大きな大きな、ほんとうに不恰好な瘤が出來てしまひました。

『どうだ思ひ知つたか』。と魔法使ひは申しました。『自業自得のフン瘤ぢや、解つたか。貴樣が仕事をしない、それで自から招いた天罰のフン瘤といふものぢや。今日は木曜日ぢや、いゝか。仕事の始まつたのは月曜日、それ以來貴樣は何一つ仕事をして居らん。サア、解つたら働け』。

『背中にこんなフン瘤なんて背負つて、仕事が出來るもんですか』。駱駝は申しました。

『それには目的があるのぢや』。魔法使ひは申しました。『貴樣はこの三日間といふものをすつかり無駄にしてしまつた。だからこの後貴樣は何一つ食べなくとも三日間は働けるやうにしてやつたのぢや。貴樣はそのフン瘤を食つて生きてゆける。どうだ解つたか。これで俺が貴樣に何にもしてやらなかつた、などとは言はせないぞ。サッサと沙漠から出て、あの三匹の者のところへ行け。溫和しくするのだぞ、そしてフンと働け』。

そこで駱駝はフン瘤もなにも背負つたまゝ、フンと一つフン張つて、やがて三匹のところへやつて參りました。そういつた譯で、その時以來駱駝は背中にあのフン瘤を今でも背負つて居るのであります。(尤も今ではタン瘤と言つてフン瘤とは申しませんネ。それは駱駝がこの時のことを思ひ出して、氣持惡く思はないやうにといふのです)。でも駱駝はあの世界の始まりに無駄にした三日間の償いが、まだ今でも出來ないのだそうです、そして未だにお行儀よくすることを知らないのですトサ。

(おはり)

三、何故鯨に喉が出來たかといふお話

昔、昔、大昔、海の中に大きな大きな鯨が一匹ゐました。鯨の御馳走は海のお魚です。だから鯨はヒトデやらヒラメやら、カレイやらカツオやら、カニやらカマスやら、サバやらサンマやら、それにあのヌラヌラする鰻までとつて食

べました。魚といふ魚は見つけ次第に食べてしまつたのです――で、到頭おしまひには廣い海中に小さな魚がたつた一匹だけ生殘りました。がこれがこてもすばしつこい魚で、いつも鯨の右の耳の直ぐ後にくつついて游いで居るのですから、食べられる心配はありません。『あゝお腹が空いた!!』到頭ある日鯨はニューと尻尾で立上つて申しました。するこ例のすばしつこい奴が、『モシ、モシ、大王樣、あなた樣は人間こいふ奴を召上つたことが御座いますか』。

『イヤ、未だない』こ鯨は答へました。『どんな物だ一體』。

『すばらしい御馳走で御座いますよ、尤も少々ブツブツ致しますやうですが』。

『では、少し持つて參れ』。鯨はそう言つて大きな尻尾で海の水をグイこ一搔き致しました。

『ヘイ、ヘイ、一度に一匹でもう澤山で御座います』。こすばしつこい小魚は申しました。『北緯五十度、それに西經四十度のこころへいらつしやいますこ、今一度一人の舟乘が難船致しまして、筏に乘つて浮いて居ります、空色のズボン吊りをして、(皆さん、このズボン吊りを忘れないで下さい、よろしいか)。ジャック、ナイフを一つ持つて居るきりで御座います。だが念の爲に申上げておきますが、こいつは恐ろしく智慧袋の大きい奴で御座いますから、御用心なさいませ』。

『サア、それから鯨の游いだここ、游いだここ。やがて北緯五十度、西經四十度のこころへ來てみるこ、果して海の眞中に空色のズボン吊りをして、(皆さん、このズボン吊りですよ、覺えてゐて下さい)。ナイフを持つた船乘りがたつた一人、筏につかまつて流れてゐるではありませんか。

鯨は尻尾まで割れさうな大きな口をパクリこ開いて、船乘りも、船乘りのつかまつてゐた筏も、それからズボン吊り(忘れてはいけませんよ)。も、ナイフも殘らず一呑みに呑んでしまひました、そして眞暗な溫いお腹の中の戸棚の中にチャンこ藏ひこんでしまひました。それから、さも美味しさうに舌鼓を打つて、クルリ、クルリ、クルリこ尻尾で立つて三べんお廻りを致しました。

こころが船乘り――、恐ろしく智慧袋の大きな船乘りでしたネ――この船乘りは鯨のお腹の眞暗い溫い戸棚の中に

入れられたことがわかると、俄にドタンバタン、ドシンズシン、ガタンピシャン、ビョンピョン、ドンドン、いやもう、踊る、はねる、叩く、蹴る、呶鳴る、わめく、足踏みする、飛上る、それはそれは大變な騒ぎでした。鯨はすつかりお腹の氣持が悪くなつてしまひました。

そこで鯨は泣きそうになつてはしつこいお魚に申しました。『この人間といふ奴は恐ろしくゴツゴツした御馳走だな。それに吃逆が出さうで仕方がない。コレコレぞうしたものだ』。

『では、いつそ出ろと仰言いませ』。とはしつこい小魚は答へました。

そこで鯨は自分の喉の奥へ聲をかけました。『ヤイ、出て失せろ。溫和しくしないか。吃逆が出る』。

『ウンヤ、出るものか』。船乘りは申しました。『そんなら俺を故郷の英國の海岸へ連れて行つてくれ、すればお前の言ひ分だつてきいてやらんでもないが』。そして船乘りは益益猛烈に躍り出しました。

『連れて歸つておやりになつた方が宜しう御座いませう』。とはしつこい小魚が鯨に申しました。『どこにかく恐ろしく智慧袋の大きい男だといふことを申上げて置くと宜敷う御座いましたが』。

サア、そこでまた鯨の游いだこと、游いだこと。吃逆をしいしい、二つの鰭と尻尾とで根かぎり水をかき分けました。そして到頭船乘りの故郷の英國の海岸までやつて參りました。鯨は出來るだけ海岸へ泳ぎ上つて、バクリと口を開けると、大聲で‥‥『英國海岸――ロンドン行きの方はお乘換へを願ひます――』と申しました。で船乘りは鯨が丁度、ロンドン‥‥と大きく喉を開けた隙に大手を振つて出てしまひました。ところが、この船乘りは恐ろしく智慧袋の大きな男でしたネ。でこの男は鯨が一生懸命に游いでゐる間に、ナイフを出してあの自分の乘つてゐた筏を割いて、小さな四角の格子にこしらへました。そして空色のズボン吊りでガツシリ結びつけると、(サア、皆さん、何故ズボン吊りを忘れていけなかつたか、これで御解りですネ)。グイと鯨の喉に押しこみました。そしてそのまゝ格子は鯨の喉に

(七二頁下段へ)

使用出來かねますから代りて智利硝石を使用するのが便利であります。是は又芝より弱い雜草を枯死させる働きをもつて居りますので除草をも兼ねる事になります。

水に極めて溶け易く着色する事も、惡臭もなく、使用時に臨んで適當量を水中に入れ數回攪拌さへすればよいのであります。適當量と申しますのは水一斗に對して智利硝石三十匁の割合に溶かしたものを普通使用して居ります。

使用上の注意としては如露でくまなくかける事、むらにかけますと施肥した部分丈が葉色がよくなり芝の緣に不同が出來て見にくいものであります。又化學肥料は一般に作用が激烈ですから濃すぎないやうに稀める事であります。

花壇の植込みに就て

本月に入りますればいよいよ花壇の植込みに忙しくなります。

秋植込みました球根類を觀賞するかたはらフレーム内で育生しましたマーガレット、シネラリヤなどの滿開になつたものを豫定の場所に下さなければなりませず、露地植のパンジー、ストック、バージニアンストック、デージー、金盞花、鉢植にしておいたルーピナスなども夫々花壇草として用ひられるのであります。

又春植の球根類も夫々芽分け、株分けを行ひまして植込みしなければなりません。

苗床には秋花壇を賑はす爲の種子も播きつけなければなりません。

（七八頁より）

ピッタリくつついてしまひました。

鯨の口から飛び出した船乘りはそのまゝお母さんの家へ歸つて、お嫁さんをもらつて其後樂しく暮しました。

鯨もまたそうでした。たゞその時以來こいふものは、あの船乘りの殘して行つた格子がごうにも喉につかへて、咳をして吐き出すことも出來なければ、一呑みに呑み下してしまふことも出來ないのです。で今でもこの格子が大へんな邪魔になつて、鯨はあの大きな體でごく〳〵小さいお魚の外は何にも食べられなくなつてしまつて、だから鯨はあなた方、可愛い坊ちやん孃ちやんを決してこつて食べたりなどしなくなつたこいふお話ですトサ。（おはり）